

Chapter 31 Teaching and Learning Second Language Pragmatics

発表の構成

1. 著者の情報
2. 論文の構成
3. 論文の要約
4. 考察
5. 参考文献

【おねがい】 このレジュメは、東京学芸大学大学院国語教育専攻日本語教育 コースの授業「日本語教育方法論演習」(授業担当者: 南浦涼介)での大学院生で取り扱った、Hinkel, E. (Ed.) 2017. **Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning.** の発表のレジュメです。教育的価値、資料的価値としてウェブでの掲載を行っておりますが、いわゆる「論文」ではありませんので、論文等への引用 や掲載は固くお断りいたします。また、分析対象の著作権は著 作者、資料文書の著作権は発表者に記しますので、無断転載は ご遠慮ください。質問については、東京学芸大学南浦研究室 (<http://minamiura-lab.com/>)までお願いいたします。

1. 著者の情報

Andrew D.Cohen

1994年ワシントン D.C 生まれの言語学者。国籍はアメリカ合衆国とイスラエル。ハーバード大学でフランスの歴史と文学を学んだ後、スタンフォード大学で言語学を学ぶ。国際開発教育学博士。応用言語学関連の著書・論文多数。現在はニュージーランドのオークランドに在住。2000年ごろから語用論に関する事例研究及びコンサルティングを行っている。Website : <https://z.umn.edu/adcohen>

2. 論文の構成

英語	日本語訳
①Statement of Purpose/Focus	この文章の目的と焦点
②Defining Terms	用語の説明
③Developments/Trends/Traditions in L2 Pragmatics	L2 語用論研究の経緯
④Research Methods	筆者を含む研究者の研究・観察事例
⑤Conclusion and Future Direction	結論と今後の方向性

今日のキーワード

Pragmatics : 語用論 使用された言語・文がある文脈の中でどう解釈されるかを研究する分野のこと。社会言語学の1領域。

Speech Act : 言語行為 論文中では間接言語行為のこと。

EFL : English-as-a-foreign-language 外国語としての英語 (例: 日本人が習う英語)

ESL : English-as-a second-language 第二言語としての英語 (例: フィリピン人が習う英語)

3.論文の要約

①この文章の目的と焦点

L2を学習しようと思った時、それぞれの言語にネイティブスピーカー独特の慣用的な言い回しに出会うことがある。学習者が語用論的知識の欠如によってL2での言語活動の中で一つの悪い思いをしないようにするために教師は教室で何を教えたらいかがをこれまでの研究者たちの実践を掲載することで考察したい。

②用語の定義

- ・L2の語用論は一般的に社会言語学の1領域（下位概念）とみなされている。
- ・語用論は「話し手」の意図を「聞き手」が解釈することを考えていくが、その際に会話の際の焦点・意図・思い込み・振る舞いなどが影響するものである。
- ・L2の語用論的コミュニケーションが成功するかどうかは
 - (1) 言語使用者の当該L2の習熟度及び別の言語（特に関連のある言語）の習熟度
 - (2) 言語使用者の年齢・性別・職業・社会的背景と、適切なL2でのコミュニケーションの経験の有無
 - (3) 言語使用者のネイティブとの直近のコミュニケーションと日常生活での多言語・多文化体験の有無に影響される。

③L2語用論研究の経緯

筆者自身が母国語である英語以外に12の言語を学習してきた結果、語用論的失敗を体験したことによって語用論に注目するようになった。これまではL2について文法事項に注目がおかれてきたが会話を中心とした教授が主体になるならなおさら語用論は注目すべき事項であり、研究対象になり得る領域である。

④具体的な事例（本文はレビュー論文のため抜粋）

(1) ニュージーランド英語の特徴についての検証（2012 Holmes, Marra, Vine）

マオリ族（先住民族）とパケア（イギリスをはじめとするヨーロッパからの入植者）の異文化間交流に焦点を当てた観察。ニュージーランドでは「平等主義」とはいうものの、マオリのルールが軽視される可能性が高く、パケアからマオリへの無意識の侮辱もある。会議のスタイルや発言の仕方も違い、会議中の批判的なコメントをマオリは間接的・暗黙的・一般化して発言するが、パケアは直接的・競争的・対立的に発言するなどの差異がある。この二つの文化が職場で微妙に影響し合ってニュージーランドには特有の価値観（≒言語表現）が生まれている。

(2) ジョークの有用性 (2015 Shively)

スペインのトレドに語学留学したミネソタ大学の 6 人の学部生とそのホストファミリーを対象に行った 24 回 (12 時間) の観察。スペイン語での会話中の冗談は (L2 学習者の本来の目的ではないので誤解が起こるが) 学習者が言い回しに興味を持つため潜在的に L2 学習を促進する役割がある。

(3) 香港の職場にある文化・権力・ジェンダーの観察 (2012 Ladegaard)

男性スタッフ 3 人と女性スタッフ 3 人を含む香港の小規模工場での観察。ビジネスミーティングにおいて 2 人の女性リーダーが暴力的な言葉遣いをしたり罵声を繰り返して使用した。相手の容姿を攻撃する発言もみられた。こうした盲目的な侮辱は上司が職場での地位を維持する手段として用いている。この工場の文化の中では力関係や階層的关系が大きな特徴を持っており、これは中国の指導者が父性的な管理スタイルを採用することが合理的だと考えていることに由来する。中国の主従関係や親孝行を重視する文化の中においては従業員は搾取される一方である。またこの 1 件の事例しか提示していないが最近の社会言語学で述べられているように女性は本質的には男性に比べて優しくも丁寧でもないという主張を裏付けている。

(4) 感謝の言葉 (2010 de Pablos Ortega)

イギリス・アメリカ・スペインで 300 人を対象に口頭で感謝の意を表す場合についてのアンケートを実施。スペイン人はアメリカ人やイギリス人に比べて感謝を言語化しないことがわかった。

イギリス人→スペイン人 感謝を言語化しないのは失礼で怠惰だ

アメリカ人→スペイン人 イギリス人ほど否定的反応なし

スペイン人→スペイン人 スペイン文化圏では当たり前だ

(5) 日本人の謝罪 (2013 Sandu)

日本のドラマで使われた台詞から「ごめん」「わるい」「ごめんなさい」「すみません」の使い方を考察。

「ごめん」「わるい」→「すみません」何らかの議論をしたり緊張状態にある主人公が葛藤を表明したり、不平や交渉をしたり、態度を変えたりする時に使う。

「ごめん」「わるい」→「ごめんなさい」話し手が対話者から自分自身を遠ざけようとするとき、または話し手が心から謝罪したいときに使う。

(6) 依頼の仕方 (2011 Economidou Kogetsidis)

キプロス大学の英語で書かれた 200 件の E-mail を検証して共通点を探す。英語学習者は従来の間接的な依頼「would you~?」という依頼の仕方ではなく「please ~」という表現を使う人が多く、依頼対象に選択の余地を与えない印象を与えている。

⑤結論と今後の方向性

様々な事例を見てきたが考察に値すべき点は多く残る。例えば、アジアの英語学習者が英語を話すときに「イギリス人の慣用的な言い回し」が使われているのか。英語と学習者の第一言語との間に文法上の共通点はあるのか。学習者が「イギリス人の慣用的な言い回し」を自分の英会話のなかに反映しようと努力する時、その会話の中にイギリス人がいない場合でも「イギリス人の慣用的な言い回し」は必要なのか。「イギリス人の慣用的な言い回し」ができないことはその人の身につけた英語は失敗というのか。などである。

phatic communication (習慣的な挨拶表現)、または small talk (小話) は情報やアイデアを伝えるのではなく、感情の分かち合い・友好関係の構築・維持・向上など社会的相互作用の実践において重要な役割を果たす。しかし、教材が phatic communication の有用性を独立した話題として提示することがないのでノンネイティブの人々は、小話を効果的にする方法を知らない可能性もある。教材で phatic communication の有用性をきちんと定義しないどころか、むしろその特有の表現を取り扱うこともない。それぞれの文化特有の効果的な phatic communication に、いつ、誰がどうやって参加しているのか、それが使われる根本的な理由、種類など、複雑で微妙な問題について認識することが必要であり、そのような言い回しが対処する可能性のあるトピック、および達成可能な効果について説明することが必要ではないか。2006年から2015年にかけて複数の研究者がノンネイティブに向けて特定の L2 側面の言い回し、phatic communication を教える必要があると提案している。

また、L3 学習者はコミュニケーションに対しての感度が高いことがあるが、これはすでに L2 の習得において語用論の存在に気づいたからではないか。そうであるなら、授業者が語用論に対する気づきを促すことも教室でできることのひとつではないか。

4. 考察

- ・筆者は L2 学習者に phatic communication を教えることの重要性を説いている。発表者はその意見に概ね賛成である。L2 学習者の間違いや失礼な言い回しについて指摘する必要があるのは当然のこととして、それ以上に学習者に語用論的課題を提供する必要がある。しかし、その際、どの程度 L2 を習得した人にその話をするのか、教材として提供せねばならない事柄はなにかの選択が難しいと感じる。
- ・留学生から「日本語は他の言語に比べて特に暗黙のことが多い感じがする」との意見を聞い

た。しかし、日本語ネイティブの発表者は日常会話の中に暗黙の了解が多く含まれていることを意識して言語を使用していないことに気づいた。そうであるなら、日本語ネイティブが日本語の中にある語用論を体系化・教材化するのは難しいのではないかと思う。日本語を学習する様々な国の人々が日本語と母国語との差異を感じ、2つの言語を比較することで初めて日本語の持つ暗黙性が浮き彫りになるとしたら、「語用論的教材を提供する」ということは広大で深遠な課題となるのではないか。アジアとヨーロッパとでは生活様式が異なる。また、それに付随して言語の様式も異なると思われる。アジア人とヨーロッパ人とでは日本語に対しての「暗黙性」の感じ方が異なるかもしれないので、国単位・地域単位で日本語をL2として学ぶ人から学習過程や体験などから感じた日本語の「暗黙性」を調査し、それを体系化できたら有用な教材の提供ができるのではないか。

- ・さらに、発表者はL2学習者に対してネイティブの寛容さが必要だと考える。語用論は会話の中の慣用表現や特定の文脈の中で用いられるやりとりである。ということは論文を書くような厳密さを要求されているわけではないので、会話の文法的正確さ（特に時制や助詞の使い分け）や「この場は感謝をのべるべき」「この場は沈黙しておくべき」等のネイティブ同士の常識をL2学習者に求めることを控える必要があるのではないか。そのために私たちが今できることは何か、誰にどういうことをしていく必要があるのかなどL2教育において語用論的視点での授業展開はたくさんの課題と可能性を持っている。

5. 参考文献

- 『言外の言語学 日本語語用論』 小泉 保 (1990年3月20日三省堂)
『語用論への招待』 今井邦彦 (2001年2月15日大修館書店)
朝倉日英対照言語学シリーズ『語用論』中島信夫編 (2012年8月25日朝倉書店)

6. 追加 (ディスカッションのまとめ)

- ・話し手と聞き手の持つ文化が違えば母語話者同士であっても会話の中で齟齬が生じることがある。多くの人とコミュニケーションをはかることで語用論を習得してきた実感があるため、外国語学習において語用論が重要であるということも理解できる。また、発表者のいうように母語話者としての寛容さも必要だと思うが、正確さも必要だと思うのでそのふたつの間にどう折り合いをつけていくのか考える必要があるのではないか。
- ・L2学習者はなるべく母語話者が話している通りに言語を身に付けたいと考え、言語を母語話者との多くの会話のなかで体験を通して語用論的な言語活動を身につけていくため、母語話者の寛容さは必要ないのではないか。
- ・留学経験を通して母語話者とジョークを交わす機会があった。それが自分の言語力の向上につながったかはわからないが、学習意欲の向上にはつながった。
- ・「母語話者と同じようになる」ことを目的とした従来の学習方法とは異なり、学習者ひとりひとりがもつ文化的背景を活かしながらL2を学ぶことは、学習者にとってより有効な言語習得につながるのではないか。

など、多くの観点からの意見がディスカッションの場で挙げられた。教室には国籍・年齢・性別の異なる学生がおり、それぞれの立場から語用論の可能性について述べあうことができた。語用論は大変興味深い分野には違いないが、例えば L2 学習の教室では実践準備、実践、観察のみならず、その後の影響まで追跡調査・観察が必要だと思われ長期間に渡っての調査ができる環境を調整することも課題の一つではないだろうか。